

古民家再生

瀧下嘉弘  
(岐阜高卒)

私は郡上で生まれた。19才の時から鎌倉に住みはじめ、還暦を過ぎた今も、仕事で岐阜に行ったり来たりしている。

私が建築の仕事をしたきっかけは偶然であった。1950〜60年代当時、御母衣ダムと九頭竜ダムが建設され多くの村々が水没することになった。合掌造りの家が壊れるという話を聞いて、当時借家住まいであった私の家族は、それを譲っていただきマイホームを建てようという事になった。日本では新築するより古家を解体運搬して移築する方が安くできた時代であった。

まだ大学生であった私は家族みんなでその合掌造りの家を見に行った。伊勢という村の庄屋さんの土間に入った瞬間、自然で健康的なお金が私をホッとさせた。暗くて広い空間へ足を運ぶと見たこともないような巨木を駆使した梁組みが頭上に浮かんできた。煤で真っ黒になっている。柱は太い。少し神秘的で不思議な空間である。

直感した。豪壮で頑丈な造りは素人の私でさえ「壊すのはもったいない」と思った。40年以上も昔のことだがそのときの状況が今でも鮮やかに目に浮かぶ。

持ち主は水没の補償金のこともあり、「雪の降る前に持つて行って欲しい」とのことであった。その場で簡単な契約書を作成した。法学部の学生として初仕事である。代金は五千円とした。それから2年後、私の家族はこの古い合掌造の家を鎌倉の源氏山、大峰に移築するのである。

この家は創建以来275年経つが未だ狂いは少しも無い。またこの家には不思議な魅力があるらしい。我が家を訪れる人でこのような家を建てたいと言う勇氣ある変人が



出てきた。私は古家の移築を生涯の仕事と考えていなかったが、豪雪地帯の豪壮な古い木造建築に少しずつ魅せられていった。

日本人を奥様に持つアメリカ人が最初の依頼主となったとき素人の私は戸惑った。しかし、「古い合掌造りを軽井沢の別荘に」という彼らの希望を、大勢の人たちの助けを借りて何とか成し遂げた。その後はクチコミで仕事が増え、それにもない必要に迫られ建築士の資格も取り、海外へも仕事の場を抜けた。昔の木造建築は奥が深く学ぶことは山ほどある。日々勉強である。

最近の私の仕事に吉祥寺のS邸、日本民藝館の創始者である旧柳宗悦邸修復工事、井の頭公園傍のM邸がある。1980年代にもったいないと思ひ解体して倉庫に保管してあった古家をM邸として甦らせた。20年も倉庫に眠っていた古民家(明治6年)がいま東京で二世帯住宅と

して生き返る。時代に逆行しているようでもあるが、丈夫で長持ちすることは良いことであり、資源のことを思えば、地球に優しい建築を先人達は残したといえる。そして例外なく施主は私と同じ価値観と美意識を共有する。このことは救いである。

近代化と称する時代に翻弄されて価値ある古家が数知れず破棄処分されていった時代に「もったいない」と言う感覚を信じて今までやってこれたことは有り難いと思う。仕事のお蔭で今も倉庫と作事場のある「ふるさと岐阜」へ帰れると言うおまけ付きである。故里の水、なすや瓜は昔も今も美味しい。次世代に何をどのように残すのか考える。

鎌倉にて2008年夏

